東京都立三鷹中等教育学校　後期課程進路通信「はるつげくさ」

春 告 草

第 153 号　令和元年 9 月 25 日　進路指導部発行

英語外部検定利用入試を調べよう

5年生が受験する2021年度入試で注目を集めているのが、英語資格・検定の活用だ。こういった外部検定利用入試は春告草前号でも触れたが、既に「英語４技能テスト利用入試」などの名称で現行の入試制度でも行われている。

制度の内容、資格・検定試験のどれを受けたらよいのか、利用するメリットはあるのか等についてみていきたい。

外部検定利用入試とは

英語検定と言えば、まず「英検」を思い浮かべるが、この他に「GTEC（ジーテック）」や「TEAP（ティープ）」などの各種検定が行われている。外部検定利用入試は、これら検定の級、スコアなどを入学者選抜に利用するものだ。

2015年度入試で上智大がTEAP入試を開始して以来、外部検定利用入試を行う大学数は、５年連続で増加を続けている。今年度の一般入試で資格・検定を利用した大学は、全国768大学のうち187大学にのぼり、外部検定利用入試を行なった大学数の割合は前年の19．8%から24．3%と、4．5ポイントアップした。

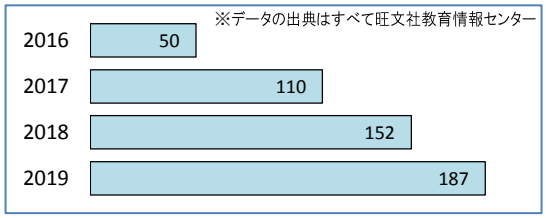
公立大でこの制度を導入しているのは、国際教養大と兵庫県立大の２大学だけであるが、国立大の利用率は20%を超えていて、首都圏では千葉大をはじめ４大学が導入済である。次ページに来年度の一般入試で外部検定利用入試を行う首都圏国立大学と国際教養大の利用状況を載せた。

資格・検定の利用方法は大別すると４つで、出願資格、得点換算、加点、合否参考・判定優遇がある。

得点換算はこれらの中で、一般入試での利用率が最も高く、外部検定利用入試を導入している大学のうち、６割強を占める。得点換算の特徴としては「英検準２級は80点、２級は90点、準１級以上は100点に換算」といった具合に、利用できる級やスコアの範囲が広く、幅広いレベルの受験生が利用しやすいことが挙げられる。

東京海洋大は４年前に海洋科学部（現海洋生命科学部）が出願資格を「英検準２級以上」と定め、現在も２学部で実施している。大学側からみて、受験生の学力水準を一定のレベルに担保できることがメリットだ。このため、出願資格は推薦・ＡＯ入試での利用率が高くなっている。

■一般入試で資格・検定が利用できる大学数



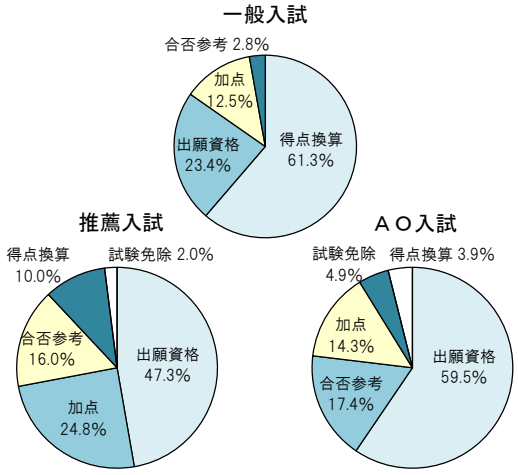
■設置者別の資格・検定利用状況（2019年度入試）

設置者別全大学数		資格･検定利用大学数	設置者別利用率	利用大学に占める割合
国立大	82	17	20.7%	9.1%
公立大	90	2	2.2%	1.1%
私立大	589	168	28.5%	89.8%
全　体	768	187	24.3%	100%

■資格・検定の主な利用方法

出願資格	大学が指定した資格･検定を出願の要件にする。 例：英検2級に合格していないと出願できない
得点換算	大学が指定した資格･検定を、その大学の英語試験の得点に換算する。 例：英検2級合格は、英語試験の80点に換算する
加　点	大学が指定した資格･検定を、その大学の入試の総合点に上乗せする。 例：英検2級合格は総合点に10点を加算する
合否参考 判定優遇	合否判定の際に何らかの優遇措置を行う。 例：入試の得点が同点だったとき、英検2級合格者が優遇される

■資格・検定の利用方法（2019年度入試）

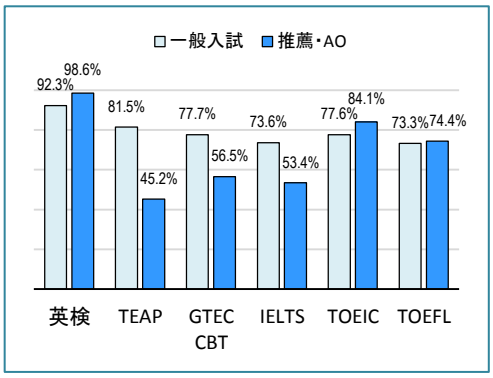


どの資格・検定を受ければよいのか

外部検定利用入試でどの資格・検定を利用できるかは、大学により異なる。志望校が決まっているのであれば、大学のホームページなどで利用できる資格・検定を調べよう。検定によっては志望大学で利用できない場合もある。まだ、決めていないのであれば、多くの大学が採用している汎用性の高いもので受験するのが、選択ポイントの一つになる。

右のグラフは、外部検定利用入試を行っている大学についての利用割合だ。一般入試、推薦・ＡＯ入試共に高い採用率を誇るのは「英検」である。英検が多くの大学で認められているのは、日本の高校生が学校で習う内容に沿って問題が作られていることが理由だ。TEAPは上智大が開発に関わった検定で、大学入学後の授業や学生生活を想定して問題が作られている。この為、“major”という単語一つをとってみても、「主要な」という意味の他、「専攻科目」という意味での使い方にも注意しなければいけない。また、IELTSやTOEFL、TOEICは、英語圏への留学や就労を目的とした検定で、「ビジネスマンとクライアントとの会話」といった内容の出題もある。GTECは本校でも実施しているので、感触は分かっているだろう。一口に英語検定と言っても、それぞれに違いはある。各資格・検定試験の内容や問題への相性なども、選択ポイントの大きな要素となるだろう。

■大学入試における資格・検定の採用率（2019年度）



■2020年度一般入試　首都圏国立大学の資格・検定利用状況

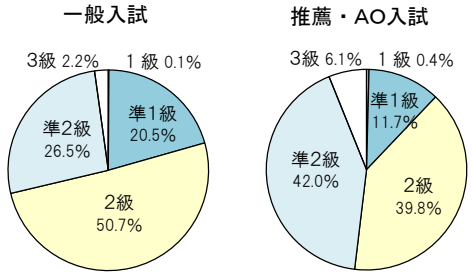
大学名	学部	入試日程	利用方法			利用できる主な資格・検定試験			備考
			出願資格	得点換算	加点	英検	GTEC	TEAP	
埼玉大	経済[昼]	前		●			960		前期国際プログラム枠。資格レベルに応じて、センター試験英語の得点に段階的に換算（TOEIC 基準）
千葉大	国際教養	前		●	●	CSE 1950	960	225	資格レベル応じて個別試験外国語の得点に段階的に加点。最高位のレベルは満点に換算し、外国語の受験を免除。
	教育（英語教育）	前		●	●	CSE 1950	960	225	
	文（人文）	前			●	CSE 2180	1120	280	資格レベルに応じて個別試験外国語の得点に段階的に加点。
	理（物理）	前			●	CSE 2180	1120	280	
	園芸	前			●	CSE 2180	1120	280	
	看護	前			●	CSE 1950	960	225	
東京海洋大	海洋生命科学	前、後	●			準2級	840	160	出願資格 GTEC は4技能オフィシャルスコア
	海洋資源環境	前、後	●			準2級	840	160	
東京藝術大	音楽	前		●		準1級			センター試験英語の得点を満点に換算
国際教養大	国際教養	A、B、C		●		準1級	1200	360	センター試験英語の得点を満点に換算 GTEC は CBT タイプに限定

求められる資格・検定のレベルは

先にも説明したように、一般入試と推薦・ＡＯ入試とでは、資格・検定の利用のされ方が同じではない。この為、それぞれの試験で求められる級、スコアが若干異なる。

右のグラフは、今年度の一般入試における外部検定利用入試と推薦・ＡＯ入試で大学が求めるレベルを集計し、これを英検の級に換算したものだ。

■外部検定利用入試で求められる英語レベル
（2019年度　英検級換算）



これを見ると、一般入試では英検準２級（高校中級程度）と２級（高校卒業程度）で８割近くを占めているのが分かる。推薦・ＡＯ入試についても同様の状況であるが、構成比をみると準１級（大学中級）、２級の割合が減り、準２級の割合が増えている。この違いは、一般入試では得点換算での利用が多く、高いレベルの英語力が求められるのに対し、推薦・ＡＯ入試では出願資格としての利用が多く、受験生を広く受け入れ、その後、面接や小論文などで多面的に評価したいという姿勢によるものだ。いずれにしても、最低でも準２級、できれば２級が必要となる。

20年度入試でのいくつかの事例を下に示したが、詳細は各大学のホームページなどで確認しよう。今まで使えていた資格・検定が対象外となったり、基準の見直しなどもある。最新情報を調べておこう。

また、各種資格・検定の級やスコアを統一基準で評価する必要からCEFR（セファール）対照表が提供されている。CEFRとはヨーロッパ言語共通参照枠（Common European Framework of Reference for Languages）のことで、外国語学習者の修得状況を示す国際的な尺度である。21年度以降の入試では、多くの国公立大で出願資格がA2以上と発表されているのは、皆さんも承知しているだろう。

■外部検定利用入試で採用される資格・検定の例（2020年度）

早稲田大―文・文化構想［出願資格］

一般入試　英語４技能テスト利用型

英検CSEスコア＝2200(500)
GTEC　CBT＝1100(250)
TEAP＝280(65)
TEAP　CBT＝470(110)
※(　)内はReading、Listening、Writing、Speaking各技能の基準点

立教大―全［得点換算］

センター利用入試

大学入試センター試験の英語得点と換算得点の何れかの高得点を合否判定に利用する

	95%	85%
英検CSE	2238	2113
GTEC 4技能	1120	1000
TEAP	290	261

※他に、各技能スコアの最低基準あり

明治大―経営［出願資格＆得点加点］

一般入試　英語４技能試験利用方式

英語の学部試験は免除。「国語」、「地歴、公民、数学」に加算

	出願資格加点なし	20点加点	30点加点
英検CSE	2200(530)	2467(570)	2630(610)
TEAP	290(70)	340(80)	390(90)

早稲田大―国際教養［得点換算］

一般入試（外部検定利用型ではないが、提出分を得点換算）

国語[50点]＋地歴･数学[50点]＋英語[85点]
＋英語4技能[15点]

	15点	10点	5点	0点
英検	1級	準1級	2級	準2級以下
TOEFL iBT	95 以上	72－94	42－71	41 以下

※未提出でも出願できるが、0点扱いとなる。

■英語資格・検定とCEFRレベルとの対照表

CEFR	各資格･検定のスコア											
	英検(実用英語技能検定)					TEAP	TEAP CBT	IELTS	TOEFL iBT	TOEIC	GTEC CBT	ケンブリッジ英語検定
	英検 CSE	各級のテストでCEFRの範囲が可能な範囲										
C2								9.0 ｜ 8.5				230 ｜ 200
C1	3299 ｜ 2600	合格 2630→	3299 ↑ 1級 ↓ 2304			400 ｜ 375	800	8.0 ｜ 7.0	120 ｜ 95	1990 ｜ 1845	1400 ｜ 1350	199 ｜ 180
B2	2599 ｜ 2300			2599 ↑ 準1級 ↓ 1980	合格 ←2304	374 ｜ 309	795 ｜ 600	6.5 ｜ 5.5	94 ｜ 72	1840 ｜ 1560	1349 ｜ 1190	179 ｜ 160
B1	2299 ｜ 1950	合格 1980→	2299 ↑ 2級 ↓ 1728			308 ｜ 225	595 ｜ 420	5.0 ｜ 4.0	71 ｜ 42	1555 ｜ 1150	1189 ｜ 960	159 ｜ 140
A2	1949 ｜ 1700			1949 ↑ 準2級 ↓ 1400	合格 ←1728	224 ｜ 135	415 ｜ 235			1145 ｜ 625	959 ｜ 690	139 ｜ 120
A1	1699 ｜ 1400	合格 1456→	1699 3級 1400							620 ｜ 320	689 ｜ 270	119 ｜ 100

英検CSEスコアとは

かつて「英検」の試験結果は、受験した級の合否のみが伝えられていたが、グローバル化にともなって英語力を国際的な指標で表す必要性が高まったため、合否判定だけでなくユニバーサルなスコア尺度に基づき英語４技能を評価する方法が2015年度に導入された。これが英検CSEスコア（Common Scale for English）だ。

英検CSEスコア導入により、４技能の技能ごとにスコアが均等に割り振られるため、受験者はどの技能が苦手なのかをはっきり認識できるようになった。各級の合格基準スコアは毎回固定されていて、受験者は過去の受験結果を比較して、合格までの距離をより客観的に把握することができる。導入後に基準改訂があり、改訂前のものを CSE1. 0、改訂後のものを CSE2. 0と言っている。現在の英検は CSE2. 0によって算出されたスコアで成績が表示されている。

21年度から運用の始まる「英語成績提供システム」で新規に導入される「英検S－CBT」、「英検CBT」においても「従来型の英検」と同様に「級」を指定して受験するが、CEFR対照表で測定できるCSEスコアの範囲は表のように級ごとに定められている。CSEスコアを「得点換算」または「加点」する方式の入試に挑戦する場合は、自分の英語力と志望大学の要求レベルを慎重に見極めて受験する必要があるだろう。

なお英検CSEスコアは、全受験者の答案を採点したあとで、統計的手法を用いてその試験回の難易度などを調整した上で算出される。正答数が同じでも実施回により英検CSEスコアは異なるため、受験者が自己採点によって英検CSEスコアを算出することはできない。

■CEFR対照表における英検各級とCSEスコア

級	測定可能なCSEスコア範囲		
	上限	合格	下限
1級	3299	2630	2304
準1級	2599	2304	1980
2級	2299	1980	1728
準2級	1949	1728	1400
3級	1699	1456	1400

※各級の満点は上限より高く設定されている。したがって、英検1級を受験し、満点をとってもCEFRのC2判定は出ない。反対に下限を下回った場合は、CEFRの判定は行われない。受験者目線では、これが怖い。

外部検定利用入試のスタイルが　これからのスタンダードとなる

共通テストが始まる2021年度入試においては、多くの国公立大で資格・検定のスコアが各大学への出願条件として利用される。この意味で現行の外部検定利用入試は、21年度以降の大学一般選抜（21年度入試より、一般入試は一般選抜と名称変更される）のスタンダードとなる。多くの大学では、CEFR対照表A2以上を出願資格としているが、東京工業大学では出願資格＆加点方式での利用を発表している。加点についての詳細は未発表だが、同大学の一般選抜の個別試験においては、英語150点中、筆記試験に120点、資格・検定をスコア化したものに30点を配点する。また、東京都立大学（現首都大学東京　20年４月より校名変更予定）は、個別試験において英語の試験を実施せず、共通テストの英語得点と資格・検定のスコアを選抜に利用する方針だ。

また私立大学においても、青山学院大学は多くの学部・学科の選抜で、共通テストまたは英語資格・検定、もしくは、その両方を学部試験と併用すると発表した。同大学の選抜を、学部試験だけで行うのは一部の学部・学科に限定される。

21年度入試から運用のはじまる「英語成績提供システム」への対応に、受験生、高校側が追いついていない面が現状としてはあるが、大学側から見れば、外部検定利用入試での運用実績もあり、私たちが考えている以上に、英語資格・検定を入学者選抜に利用する動きは積極的であると感じた。

前号の繰り返しになるが、英語成績提供システムでは、従来型の英検が使えない。また利用できる資格・検定も、大学受験年度の４月から12月の間に外会場で受験したものに限定される。これまでの外部検定利用入試どおりではないことも多くあるが、情報を広く集め、柔軟に対応できるよう準備をしておこう。

女子高校生のための東京大学説明会

期日　2019年11月4日（月）10時～13時
会場　東京大学本郷キャンパス法文2号館31番教室
申し込み　大学ホームページより
https://daigakujc.jp/c.php?u=00006&l=03&c=01967